

## 能 楽 史 断 章

——新資料の紹介を中心に——

天 野 文 雄

### はじめに

能の歴史は鎌倉末から現代にまで及び、その前史をなす平安時代の散楽・猿楽時代を含めると、能楽史は日本文学史にもほぼ匹敵する長さを誇っている。しかも、その間に芸能として伝統の断絶がなかった（内容・形式の変化はむろんあったが）ことを考えると、その歴史の長さは比類のない意義をもっていると言えるが、それだけに能楽史にはなお未解明の領域が多く残されている。一方、そうした謎の部分の解明に資しうる能楽資料も幸い比較的豊富に残されており、法政大学能楽研究所などによる体系的な資料の調査・収集もかなり進んでいて、未解明だった領域にも漸次光が当てられつつある状況にある。しかし、各時代、多岐にわたる能楽資料にはなお埋れているものも多く、思いがけず出合った資料が能楽史の一隅を照らすというようなことも稀ではない。本稿では、時代・領域はまちまちだが、そうした資料を紹介して、いささかそれぞれが提起する能楽史上の問題にも及んでみた。

### 一 南山城猿楽資料 ——『式内神社考証』より——

京都府立総合資料館蔵『式内神社考証』（九冊）は明治八年に京都

府下の式内社が府に提出した由緒の集成で、郡ごとに合綴されて保存されている。いずれも京都府支給とおぼしき共通の野紙を用い、毛筆で祭神・由緒・年中行事・什物・祀官の歴代等が記され、さらにそうした報告の基礎資料となった社蔵文書が転記されている。その文書は転記の時期こそ明治八年であるが、それぞれ所記の年記通りの資料性を認めてさしかえないものである。その転記文書の中に能楽資料として有用な記事が含まれているのである。そこにみえる能楽資料は管見では四点、いずれも南山城の神社の項にみえるものだが、以下そのうちまとまりのある三点を紹介することにしよう。その一は「久世郡之部」の雙栗神社の項に引かれた「雙栗三宮本源伝紀」にみえる次のような記事である。

一、康安元年<sup>丑</sup>年ヨリ神夏祭礼再興。公文下司<sup>并</sup>一族中着甲冑帶弓箭拝殿着座。

神興三基大御堂遷御之刻、

射騎 歩射 各五ヶ度

田楽法師新座本座出勤

申楽々頭若松太夫出勤

各禄米十石宛

この記事を載せる「雙栗三宮本源伝紀」は「貞治三<sup>甲</sup>辰年九月十八日設置之畢奉納社頭御内陣也 探題岩本縫殿介藤原道喜在判」という奥書を有している。右の記事はこの貞治三年（一三六四）の三年前の康安元年（一三六一）に、再興された同社の祭礼において田楽と猿楽が演ぜられたことを伝えたものである。康安元年は世阿弥生誕の二年ないし三年前で、この頃の芸能界は田楽猿楽拮抗時代であるが、この「各禄米十石宛」という扱いにも、当時の両者の勢力関係の反映が認められるようである。田楽は本新両座の参勤、二座揃っての参勤例は春日若宮祭、新日吉社小五月会などに例があるが、二座招請が多額の経費を必要とすること、言うまでもない。雙栗神社の場合は祭礼再興という記念すべき催しだったため、特例として両座参勤の形をとった可能性もあろう。さて、この資料で注意されるのは猿楽若松大夫の存在である。若松大夫は従来その存在が知られていない猿楽であるが、世阿弥生誕直前という時期に、山城の古社の楽頭職を保持していた若松大夫といかなる猿楽であるのか。これについては確証はないが、若松という名、および雙栗神社の所在地からみて、若松大夫は宇治猿楽系統の猿楽ではないかと思料される。すなわち、宇治猿楽は文明頃には藤松・幸・守菊・梅松の四座が存在していたが、四座中二座までが座名に「松」字を用いているし、また、文永八年（一二七一）に南山城綴喜郡高神社の方堅神事に参加した宇治若石権守とは「若」字が通ずるのである。地理の上でも雙栗神社は宇治の西方約五キロあたりに位置していて、そこは十分に宇治猿楽の活動圏とみなしうる地域なのである。こうした点から、若松大夫は宇治猿楽系統の猿楽と考えておきたい。宇治猿楽諸座の固有名が資料に現われるのは永享・長禄頃からであり、そ

れ以前は文永の若石権守まで一気に溯ってしまい、その間の宇治猿楽の動静もまったく不明の状態にあるのだが、若松大夫が宇治猿楽の役者であるとすれば、その間の資料の空白がすこしだが埋められることになるわけである。また、宇治猿楽が保持していた楽頭職として確実なのは、大和では大安寺・田部・小田中・豊田・紀寺の神事があるが、本拠地の山城では羽束師明神にその可能性が指摘されている程度で、確実な例は報告されていない。若松大夫が宇治猿楽の役者であるとすれば、この資料は山城における宇治猿楽の楽頭職保持の貴重な事例だということにもなるわけである。なお、ここには「猿楽」ではなく「申楽」とあるが、「申楽」なる用字の初出は『風姿花伝』であり、観世座で使われ出したかと考えられるこの用字が、康安元年という時期の文書に使われていたとは考えにくい。これは転写に際しての改変であらう。

その二は、「綴喜郡之部」の佐<sup>さ</sup>牙神社の報告にみえる次のような記事である。

天正四<sup>乙</sup>子年十月廿日焼<sup>ヤキ</sup>出ス。山本藤左衛門尉忠重、森次郎義貞ト申牒シ、社頭再建之基ヲ紀シ、同十三<sup>乙</sup>酉年普賢寺一族相寄、殊ニ山本忠重宮本惣発主トシテ再建成就シ、同九月十三日宮遷申楽能相勤ルハ楽頭長命辨財太夫也。仍為後證誌置者ナリ。

これは「佐牙神社之神紀」として簡条書にされた佐牙神社の事歴中の一条で、天正四年（乙子）とあるが、丙子が正しい。焼失の社殿が九年後の天正十三年に再興なり、その遷宮に猿楽があったが、その楽頭が長命弁財大夫だといふのである。長命猿楽については近年表章「長命猿楽考」（『日本歴史の構造と展開』昭58）で総合的な考

察がなされ、そこでは従来の長命大和猿楽説・鎌倉猿楽説を排して長命猿楽は山城猿楽であることが打ち出されている（これは確定的）。長命弁財大夫なる猿楽が佐牙神社祭礼の楽頭であったことを伝えるこの資料もまさしく山城猿楽としての長命猿楽の活動の一端を示すものであろう。弁財大夫も従来知られていない猿楽である。

さて、右資料の伝える天正十三年前後の長命猿楽の活動状況をみると、天正九年に山城久世郡寺田の水渡神社の方堅神事で長命大夫が能八番を演じた例があり（『法堅仕度万ノ書物』）、それに次ぐのが天正二十年山城綴喜郡の和岐神社で大蔵道春（虎政）が催した勸進狂言において長命二良（次郎）大夫が翁猿楽を演じた例（『明暦堺七堂狂言芝居』）がある程度である。弁財大夫の演能は十年を隔てるこの二つの資料のほぼ中間に位置しており、当然、弁財大夫と他の二者との関係が問題になるところである。時期からみて弁財大夫がそのいづれかと同人である可能性は高く、あるいはそのいづれとも同人である可能性も低くはないと思うのだが、残念ながらそれ以上のことは現時点ではよくわからない。ただ、表氏の前掲論稿によれば、天正九年の長命大夫の演能は、やがて金剛座のツレ役として吸収されてゆく長命猿楽の最後の演能活動資料のようであるが、この資料によって長命猿楽の独立した一座としての演能活動はすくなくとも天正十三年までは降らせることができるわけである（天正十三年の長命弁財大夫は「申楽能」を演じているから）。また、弁財大夫という呼称はもちろん彼の技倆（とくに美声）に由来するのであろう。これは信長の後援をうけたという梅若妙音大夫の「妙音」が美声ゆえの呼称であったこと（『近代四座役者目録』）を想起させる。梅若妙音大夫と長命弁財大夫とはその活動時期も一部重っており、この二つの類似した呼称（妙音天は弁財天の異称）は、この時代の能役

者の通称の一傾向を示すものだろうが、この場合は、どちらか一方が他方を意識してそう名のつた可能性もありそうである。

その三はやはり「綴喜郡之部」の朱智神社の項にみえる「筒城普賢寺朱智牛頭王之宝堅流紀内殿目録之更」なる資料である。宝堅（方堅）というのは、猿楽が翁猿楽を演ずるようになる以前から演じていた正遷宮に際しての呪術芸で、右は康元元年（一二五六）八月二十日同社の正遷宮に際し、新造なった内殿に奉納された方堅神事の流記であり、現存方堅資料中最古の資料である。この資料の存在自体については小稿「翁猿楽の成立と方堅——呪師芸の継承——」（『中世文学』30）で指摘しているが、ここに全体を紹介しておきたい。ただ、惜しまれることに、この資料では猿楽の参勤については一言も触れていない。しかし、小稿でも論じたように、方堅即猿楽芸と考えてよく、この折の方堅が猿楽によって行われたことは確実である。現に朱智神社では室町後期まで遷宮に際しては方堅が行われていて、それには主として長命大夫が参勤している。

# 筒城普賢寺朱智牛頭王之宝堅流紀内殿目録之更

一、康元々辰年秋八月十五日吉祥辰、神殿皆造再建立、作事新始已刻、十八日寅上刻神供神酒奉献備、同十九辰上棟、廿日亥中刻上遷宮。

一、御師 普賢教寺学頭権僧正健大阿闍梨

一、山衆役 中座僧並交衆出仕之

一、讚衆役 蓮光院 西蔵坊 弘願院  
長寿院 靈性坊 東明院

一、御厨子昇僧 舞源 長寛  
了心 観玄

一、御神宝持僧 式部御寄相  
少納言侍従

一、御駒犬昇 掃部允彦大夫

神主栗原大炊助高階朝臣

祢宜源五郎兵衛尉

民部兵衛長九大夫

當庄老長西阿弥 九十六歳、一老善蔵 八十九歳

惣行司奉行下司信濃守息長宿祢実重

公文長岡右馬允三国朝臣義峰

大工身人部盛方、小工六人

康元元年辰八月吉辰日

筆者紀重秀

## 二 元禄十五年日吉彦大夫願書

宮内庁書陵部に『山王神事能役者日吉彦大夫願書』と仮称される文書が蔵されている。元禄十五年（一七〇二）五月に日吉彦大夫なる猿楽が江州日吉山王神事の能大夫を願って山門に訴え出た際の願書で、料紙二枚継ぎ、彦大夫の自筆と思料される文書だが、室町末期〜江戸初期の能楽史研究にはかなり有益な資料である。とりあえず、以下に全文を紹介する。

おゝそれなからつゝしんて申上ル。

山王御やしろ御神事能大夫、ワたくし先祖ふたいれんめんゆいしよをもつてねかい奉り候。御當社御神事やくハ、ワたくし先祖よりそふ日吉庄五郎までふだい仕候。其あと日よし五郎右衛門と申もの、初而たけニおゝせ付させられ候。すなわち五郎右衛門死けつの時、同名頼母と一度ねかい奉り候。拙者義其せつじやくはいニ御さ候ニ付、頼母ニおゝせ付させられ候。其のち頼母緩だいの義御さ候ニ付、御いとま下させられ候ゆへ、また拙



元禄十五年日吉彦大夫願書（宮内庁書陵部蔵）

者くうはく院様を以、此ときねかい奉候へとも、久おんじゆ院様を野村吉之進ニ仰出させられ候ゆへ、せひのきたニおよハす。ワたくしぎしりぞき申候。年らしいの大もう此事ニ御さ候間、此度御さたニあつかりたくねかい奉り候。すなわちゆいしよならひにけいづとうへつニ申上候。此たん／＼きこしめしわけさせられ、御れんミんをかうふり奉り候ハ、有かたきしたいニそんし奉るへく候。よつてごん上くたんのことし。

元禄十五年午五月

日よし彦大ゆふ

山門御やくしや様

ゆいしよ

一、山王御やしる御神事能やくハそふ日よし庄五郎まです代相つたへ仕候。そそふ日よしこんのかミ、後ていはつ仕、くうあんと申候。其ちやくし弥へもん、次なん庄五郎と申候。すなわち私義ハ庄五郎ま子ニ而御さ候。弥へもんハわかきとしがきい大納言様へめし出され候ニ付、坂本の御神事やくを次なん庄五郎ニゆつり申候。かつまた右庄五郎ぎものちニ松平新太郎様へめしいたされ候ゆへ、弥へもんせかれを養子ニ仕、名代として御やしる御神事やくニ相きわめ候。其のちハ庄五郎名をかへ、初之進と申候。新太郎様ニ而名をあらため金左衛門と申候。其いらい新太郎様より御いとま被下、武勇上野ニおめてていはつ仕、しやうおく様名をはいりやういたし、しやうほと申候。くわんゑい十一年いぬのとし御上洛のミきり、ぢけん大し様、右養子庄五郎のふ御らんあそハされ候て、御はうびニあつかり、御ねんころの御由ニ而江戸へめしつれらるへくのむね仰ニよつて、山王御神やくの義いかゝつかま

ゆいしよ

一、山王御やしる御神事能やくハそふ日よし庄五郎まです代相つたへ仕候。そそふ日よしこんのかミ、後ていはつ仕、くうあんと申候。其ちやくし弥へもん、次なん庄五郎と申候。すなわち私義ハ庄五郎ま子ニ而御さ候。弥へもんハわかきとしがきい大納言様へめし出され候ニ付、坂本の御神事やくを次なん庄五郎ニゆつり申候。かつまた右庄五郎ぎものちニ松平新太郎様へめしいたされ候ゆへ、弥へもんせかれを養子ニ仕、名代として御やしる御神事やくニ相きわめ候。其のちハ庄五郎名をかへ、初之進と申候。新太郎様ニ而名をあらため金左衛門と申候。其いらい新太郎様より御いとま被下、武勇上野ニおめてていはつ仕、しやうおく様名をはいりやういたし、しやうほと申候。くわんゑい十一年いぬのとし御上洛のミきり、ぢけん大し様、右養子庄五郎のふ御らんあそハされ候て、御はうびニあつかり、御ねんころの御由ニ而江戸へめしつれらるへくのむね仰ニよつて、山王御神やくの義いかゝつかま

同〔由緒書の箇所〕

つるへきよし申上候所、御神事のふハ一兩年けだいつかまつりてくるしからざるよし、ちけん大し様御意ニづき、それより本家とをさかり申候。

一、山王御神ほうおきな御めんハ私そふまで先祖よりつたへきたり候所、ぢけん大し様そんめいニよつてほうのうし奉り候。そくニ此御めんを天ノめんと申つたへ候。天よりくたりきたるのよし申つたへ候。

一、私家のせう号の義も、御當社あるんによつて【以下裏書】  
日よしと申候。

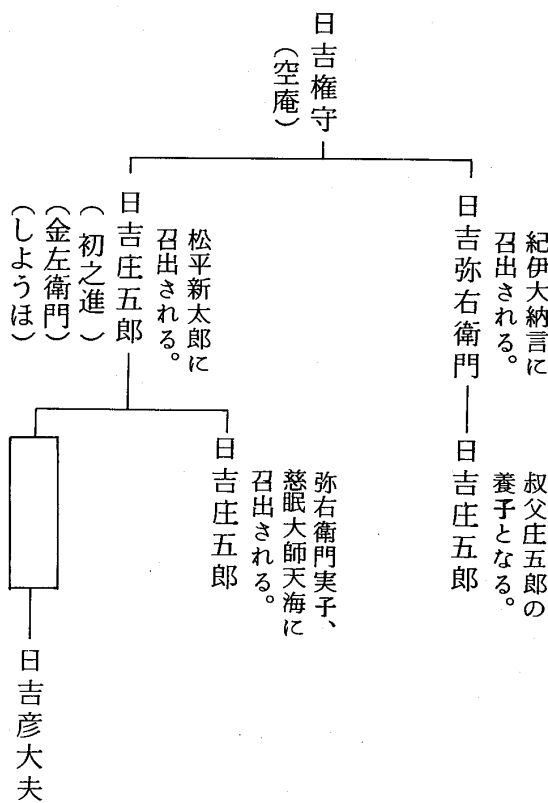
以上

日よし彦大ゆふ

すなわち、日吉彦大夫の家は代々日吉山王社の神事能大夫を勤めていたが、その職は祖父の日吉庄五郎のあと他家の日吉五郎右衛門にわたってしまった。五郎右衛門の死後、神事能大夫職は一時彦大夫と同族の日吉頼母に移ったものの、懈怠があつて頼母は大夫職を免ぜられ、その職は再び他家の野村吉之進の手にわたってしまった。祖父まで代々神事能大夫を勤めてきた家柄とて、大夫職への復帰は彦大夫年来の悲願であり、ここに自家の由緒・系図をそえて山門に訴え出る、というのである。その言葉通り、このあと引き続き由緒が記されているが、系図に該当するものが存在しない。もっとも、この由緒を「ゆいしよならひにけいづとう」と呼んでいるとも考えられるが、願書と由緒はそれぞれ料紙一枚ちようどに書かれているから、系図の分一枚は佚失した可能性も高い。筆者の日吉彦大夫は元禄年間の勸進能記録にその名がみえている(『古今稀能集』)。この彦大夫の歎願が叶えられたかどうか、あるいは当時の日吉山王神事への参勤猿楽など、調査すべきことは多いが、それは「猿楽『日吉

座』考」(『能楽研究』6・9)の業績があり、引き続き近世中期以降の日吉について調査を進めておられる片桐登氏の論稿をまつことにして、ここではこの資料(以下『元禄十五年日吉彦大夫願書』と呼ぶ)が伝える室町後期・江戸初期における日吉猿楽の動向などについて、この資料が提起することからを摘記しておきたい。

さて、『元禄十五年日吉彦大夫願書』の歎願の内容は前記の通りであるが、後段の由緒には室町末期以来の日吉の動向が記されている。それらの記述を総合して彦大夫に至る系図を整理すれば次のようになる。



この他、日吉頼母、日吉五郎右衛門の名がみえる。頼母は彦大夫と縁戚のようだが、正しい関係は不明。頼母については鴻山文庫蔵の能組によって、貞享五年(一六八八)九月六日に熱田で七日間の勸進能を催したことが知られる。五郎右衛門は彦大夫とは別系のよ

うだが、この人物については、橋本初子「叡山文庫の日吉猿楽史料」(『芸能史研究』11)によると、天和三年(一六八三)に幕府の咎めを受けて江戸に召喚されたことが知られる。

さて、彦大夫が言及する代々の中で最も時代の溯るのが日吉空庵である。日吉空庵は天文・天正頃に活躍した丹波猿楽系の狂言師日吉弥右衛門の子、観世黒雪のツレとして活躍した役者で、日吉座が観世座に吸収されて、観世座のツレとして活躍するに至る時期の日吉座を代表する役者である。前掲片桐論稿の過半もこの空庵の事績解明にあてられているが、同稿によれば、空庵の事績は慶長年間に集中していて、慶長十四年を最後にその事績はバツタリ不明になるという。そして、同稿は空庵ばかりでなく、空庵の後嗣についても、当然言及されてしかるべき『近代四座役者目録』や『万治元年書上』に記載がないことなどをもって、後嗣の早世や日吉の観世座離脱などを想定し、後者の理由として、慶長十四年三月二十六日に家康が発した四座役者に対する駿府詰めの命令を、京都を活動の本拠とする日吉が嫌った結果かとしている。これを要するに、江戸前期の観世座ツレ日吉の動向は慶長十五年以降はほとんど不明ということなのだが、その空白を埋めるのが『元禄十五年日吉彦大夫願書』などである。すなわち、『元禄十五年日吉彦大夫願書』によれば、空庵には弥右衛門、庄五郎という二人の後嗣がいたことが明らかで、長子弥右衛門は若年の頃から紀伊大納言(頼宣)に召し出され、次男庄五郎も松平新太郎に召されたため、山王社の神事能大夫職は弥右衛門の仲が庄五郎の養子となって引き継いだ、この養子(これも庄五郎を名のる)も寛永十一年に慈眼大師天海に見こまれ、江戸に移住したとある。そこで神事能大夫職は前述のように日吉五郎右衛門に移ってしまうわけだが、まず、ここに従来知られていなかった空

庵の後裔(子二人、孫二人、曾孫一人)の動向がかなり明らかとなる。片桐稿が指摘する元和七年観世大夫重成勸進能二日目にみえる「日吉子」は弥右衛門か庄五郎のいずれかであろうし、「雲上散楽会宴」所載の慶長九年三月の女院御所御能にみえる「日吉庄五郎正忠三十歳」は次男庄五郎とみてよいであろう。注目すべきはこの二人がいずれも有力大名の庇護を受けていることである。その庇護によって二人は代々続いた日吉山王の神事能大夫を勤められなくなるのだが、こうした庇護は能役者の活動を相当に拘束する結果を招来したと考えられる。空庵の後嗣が『近代四座役者目録』や『万治元年書上』に見当たらないのも、後嗣の早世が原因ではなく、そうした有力者の庇護がもたらした演能活動の拘束によると考えてさしつかえなからう。とくに初之進・金左衛門と名をかえたあと、松平新太郎から暇を賜って剃髪したと伝えられる次男庄五郎の場合などは、庇護を受けてからの彼が能役者一般の活動がほとんどできなかったことを示唆しているように思われる。

また、空庵の長子が弥右衛門であったことも、空庵の事績研究上いささか問題を提起する。それは鴻山文庫に『日吉弥右衛門将氏筆集謡』と称される寛永十五年の年記をもつ卷子本が蔵されており、この弥右衛門将氏が空庵であろうとされていることに関わる問題である。この卷子本は弥右衛門将氏の自筆とされ、巻末の識語から彼が松雪斎と称していたことが知られるが、ここから空庵は松雪斎将氏であり、寛永十五年までは存命であったと考えられている(表章『鴻山文庫本の研究』、片桐稿も一応この説に従っている)。寛永十五年は空庵の事績が途絶える慶長十四年から二十九年後であり、八十あまりで没した(『近代四座役者目録』)空庵がこの頃まで存命であったとしても決して不思議ではないのだが、『元禄十五年日吉彦大夫願



書』を介してみると、松雪斎「空庵説にはいささか疑念が生じてくる。すなわち、寛永十五年に弥右衛門を名のる人物ということであれば、空庵の長子弥右衛門と考える方がはるかに自然ではないかと思うからである。そもそも存命であったとしても寛永十五年は空庵の最晩年であるはずであり、その時期に「弥右衛門将氏」と署名していることはきわめて不審と言わねばならない。『元禄十五年日吉彦大夫願書』によれば、「空庵」は剃髪後の名であるという。その時期がいつであるかは不明だが、それが寛永十五年以降である可能性はきわめて低いのではあるまいか。空庵の長子の弥右衛門は前述のように紀伊大納言頼宣の庇護を受けていた。一方、『日吉弥右衛門将氏筆集謡』は小嶋木工助なる武士が故主常陸下館城主水谷右京大夫勝俊追善のために日吉弥右衛門将氏に執筆を依頼したもののだが、そうした武士との交遊も紀伊大納言愛願の役者であった弥右衛門にふさわしいとも言えよう。この問題の帰趨は空庵の生没年にも大きな影響を及ぼすことになる。空庵が寛永十五年まで存命であったことが疑わしくなれば、彼の八十余年の生涯はますます前にズラせる必要があるわけである。慶長十四年を限りに空庵の事績が消えるのは、あるいはそれが彼の剃髪（文字通りの）の時期で、それ以後は第一線から退いたためであるのかも知れない。寛永十五年まで空庵が生きていなかったとすれば、慶長十四年における剃髪・引退ということも年齢上十分考えられると思うのである。

また、『元禄十五年日吉彦大夫願書』は空庵が権守であったことも告げている。権守は大夫号とともに興福寺や多武峰の衆徒が薪猿楽・春日若宮祭・多武峰八講猿楽などの折に技芸優秀な役者に与えた称号で、室町中期以降で権守を称していた役者としては観世小次郎、金剛四郎次郎、美濃与五郎吉久、金春彦九郎、生一小次郎、知

徳権守、宇治猿楽の藤次郎が知られているが、日吉空庵が権守であったことはこれまで知られていなかった。猿楽の権守補任の例は鎌倉時代にまで溯り、その実態の究明は猿楽座の実態研究とも大いに関わるが、その権守の補任例として日吉空庵の例が新たに加わるわけである。ところで、従来知られていた室町中期以降の権守はその活動期がいずれも文明・永正頃であるが、空庵の場合はそれが文禄・慶長頃と大幅に後れるという違いがある。この権守については、前述の補任権守とは別に南都神事においてもっぱら式三番の翁を勤めた権守（翁権守）が室町末期に生れていたことが指摘されており（表章「大和猿楽の『長』の性格の変遷」『能楽研究』214）、この空庵の事例はその時期からみて、そうした二種の権守のいずれに該当するかが問題となるが、空庵は年預ではないから、これは補任権守とみてよいであろう。補任の場所については、天文以降は途絶えていたとされる多武峰八講猿楽の折とは考えられず、空庵自身の参勤記録もある薪猿楽か若宮祭での補任と考えるべきであろう。そして、空庵が権守であったことに関連して注目されるのは、観世座のツレ役であった空庵がツレ以外にもシテ・ワキ・狂言と諸役を担当しており、時には観世大夫の名代としてシテを演ずることもあった事実である（片桐稿による）。この空庵の活動は「諸役ヲコトク／＼クヨクシ、習・秘事迄ヨクシリタル名人ナラデハ、権守ニ成事ナラズ。太夫モシサシアイアル時ハ能ヲスル也」（『四座役者目録』）という権守の定義に実によく合致している。表氏の前記論稿は、『四座役者目録』のこの記事について、「翁権守ら年預衆の間に役々がさほど固定的ではなかったことが反映しているのではなからうか」と、その信憑性に疑問を投げかけ、「現実にはそうした人物がいたとは考えられまい」としているが、権守日吉空庵の事例は『四座役者目録』の



権守についての記述の信憑性を保証することになる。猿楽座における権守の位置とその職能については改めて吟味される必要があると考えている。

なお、『元禄十五年日吉彦大夫願書』にはこの他に、天の面と称する翁面の伝承、日吉なる姓が日吉社に由来するとの記事がみえてい。前者は『申楽談儀』23段に言及のある翁面とのかかわりが想起されるし、後者は近江日吉と丹波日吉との関連に思いを致さしめる伝承である。もっとも、後者は空庵の流が日吉社の神事能大夫を勤めていたことを考えれば、こうした伝承の存在は当然で、両日吉の関係についての決定的な資料にはなるまいが、それでも丹波日吉系の猿楽にこのような伝承が存在することは注目しておいてよいことであろう。

### 三 永禄十三年卯月朔日於殿中御一献御能次第

前田育徳会尊経閣文庫に右のごとき標題の記録が蔵されている。料紙三枚継ぎのもので、標題通り永禄十三年四月一日室町御所における一献ならびに能の次第の記録である。この演能自体は『言継卿記』同日条に、

今日於武家猿楽有之云々、御供衆御走衆等各烏帽子襖袴云々、信長以下外様衆、公家御相伴衆被参云々、信長無御相伴云々、観世五番、金春三番、以下八番有之云々

とあって、よく知られている催しであるが、本資料（以下『永禄十三年御一献御能次第』と呼ぶ）は従来知られているこの立合能についてのどの資料よりも記事が詳細で、この催しについての従来の理解をも訂正せしめる興味深い資料である。以下、全体を紹介する。

永禄十三年卯月朔日於殿中御一献御能次第

〔諸役配置図―写真参照〕

式三献参也。

御湯ツケ参上申、さて初献参、御能被始也。

御酌役者次第

- |    |        |     |         |
|----|--------|-----|---------|
| 初献 | 細川右馬頭殿 | 二、目 | 大館左衛門佐殿 |
| 三、 | 上野佐渡守殿 | 四、  | 大館伊与守殿  |
| 五、 | 一色播磨守殿 | 六、  | 一色式部少輔殿 |
| 七、 | 飛鳥井中将殿 |     |         |

公家衆御供衆迄者御通在之。但三献目ニ走衆迄ニ在之。

公方様御装束被召也。御相伴衆勿論御供衆走衆迄えほし上下被着也。

信長御とをりニも不被参也。御内、一ッ被下也。

〔墨迹〕

御供衆人数右

- |         |         |
|---------|---------|
| 細川右馬頭殿  | 大館左衛門佐殿 |
| 一色播磨守殿  | 細川兵部太輔殿 |
| 一色式部少輔殿 | 大館伊与守殿  |
| 上野佐渡守殿  | 武田上総介殿  |
| 朽木弥五郎殿  | 上野中務太輔殿 |
| 武田彦五郎殿  | 有馬播磨守殿  |
| 三淵弥四郎殿  | 松永山城守殿  |
| 武田刑部太輔殿 | 伊勢三郎殿   |
| 伊勢与十郎殿  |         |

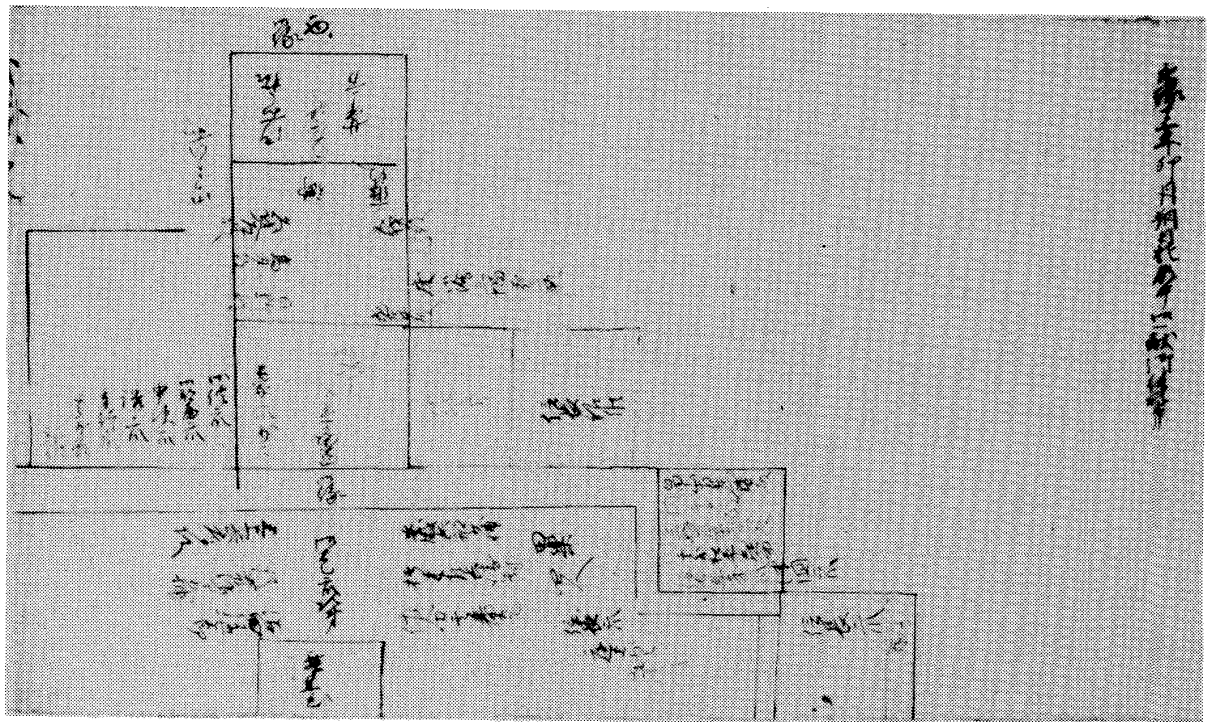
御能次第

式三番	小鼓彦右衛門 大鼓大藏二介	ワキ取 三倉 三河衆 ヨセ風流在之 兩人
玉井	ワキ小三郎 大夫三郎	ツレ喜四郎 龍女 小三郎子 彦衛門子 大 二介 彦右衛門 太鼓 春日同名 又三郎
三輪	ワキ小三郎 大夫今春	大 二介 彦衛門 太 宗十郎 信長懸目者也
張良	ワキ小三郎 大夫三郎	龍神日吉一衛門 大 高安 又三郎 同入
松風	ワキ福王 大夫三郎	ツレ日吉一衛門 大 彦衛門 二介 笛 同入
紅葉狩	ワキ大藏新三 大夫今春	ツレ兩人 小 彦衛門 高安 太 与五郎 同入
百万	ワキ小三郎 大夫三郎	子 小三郎息 大 彦三郎 太 与左衛門 春日
芦刈	ワキ大藏新三 大夫今春	小 三倉 大 いとく 太 又三郎 笛 同入
とをる	ワキ福王 大夫三郎	小 三倉 大 いとく 河衆 笛 春日

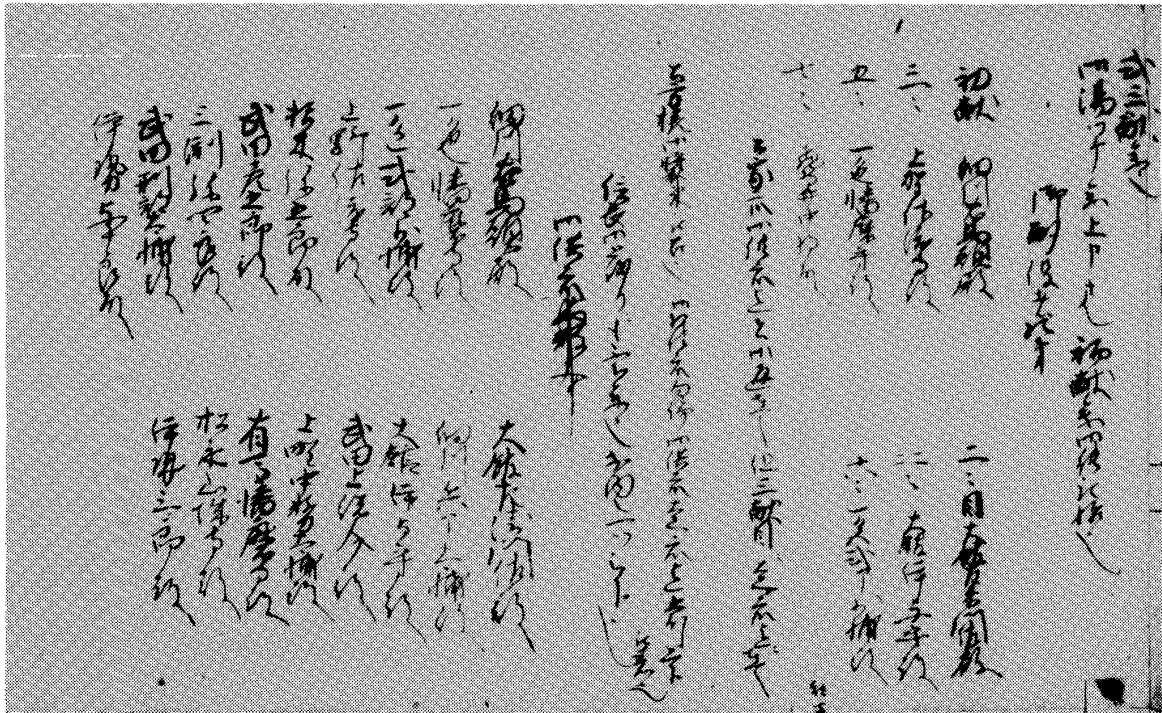
これには包紙があつて、そこに次のような上書があるので、これも紹介しておこう。

柳営遺事 永禄十三卯月殿中御一献御能次第、古書無比類、己巳春從□□團出。

判読不能の部分もあるが、己巳の歳にさる寺から出た文書で、「古書無比類」とある。永禄十三年以降の己巳は明正六年（一六二九）、元禄二年（一六八九）、寛延二年（一七四九）、文化六年（一八〇九）であり、右がそのいずれか判断の材料がないが、そのいずれであれ、ここに「古書無比類」とされていることは、『永禄十三年御一献御能次第』の料紙・筆跡の古色とあいまって、これが転写ではなく永禄十三年当時の記録原本であることを窺わせる。



永禄十三年卯月朔日於殿中御一献御能次第（尊経閣文庫蔵）



同〔御一献諸役者次第の箇所〕



同〔能組の箇所〕

さて、この催しについては前述の『言継卿記』の他に、『信長公記』『当代記』等にも記されている。そのうち唯一具体的な記事を有するのが『信長公記』であるが、『永禄十三年御一献御能次第』はそれよりはるかに詳細に当日の状況を伝えている。比較のために『信長公記』元亀元年四月十四日條を以下に引く（永禄十三年が元亀に改元されたのは四月二十三日であるから、これは永禄十三年が正確。日付の四月十四日については後述する）。

四月十四日、公方様御構、御普請造畢の御祝言として、観世大夫・金春大夫立合に御能、

一番 たまの井

（ツマ）  
勸世

二番 三輪 ワキ 小二郎

今春

三番 張良

勸世

四番 あしかり ワキ 大蔵新三

今春

五番 松風

勸世

六番 紅葉がり ワキ 大蔵新三

今春

七番 とをる

勸世

一、地謡 生駒外記・野尻清介

一、大つどみ 伊徳・高安・大蔵二介・彦三郎

一、小つどみ 彦右衛門・日吉孫一郎・久二郎・三蔵

一、たいこ 又二郎・与左衛門

一、笛 伊藤宗十郎・春一与左衛門

一、飛弾国司姉小路中納言卿

一、伊勢国司北畠中将卿

一、三州徳川家康卿

一、畠山殿

一、一色殿

一、三好左京大夫

一、松永弾正

摂家・清花御衆歴々、畿内隣国の面々等群集、晴がましき見物なり。爰におひて信長公御官を進められ候へと上意候といへども、御辞退なされ、御請これなし。忝くも三献の上、公儀御酌にて御盃御拝領。御面目の至りなり。（角川文庫による）

こうして比較してみると、単に記事の繁簡のみならず、出入や異同も著しい。それは伺候の大名にも認められるが、当面の対象たる能組についてみると、まず曲数と上演順に違いがある。『永禄十三年御一献御能次第』には『信長公記』にない「百万」と「式三番」が記され、「芦刈」の順番も異同がある。この『永禄十三年御一献御能次第』の曲数ならびに観世・金春の担当曲数は前掲の『言継卿記』に一致しており、この記載がきわめて信憑性の高いものであることがわかる。前述のように、『永禄十三年御一献御能次第』が当時の記録であると考えられることとあわせ、この他の異同・出入についても基本的には『永禄十三年御一献御能次第』の記述を採るべきものと思料する。そこで、この他の主な異同や出入を列挙しておく、

『永禄十三年御一献御能次第』にのみみえる役者にワキの福王、ツレの日吉一右衛門、喜四郎、小鼓の三河衆、観世小次郎元頼と観世彦右衛門（宗彦）の子息があり、『信長公記』にのみみえる役者に地謡の生駒外記・野尻清介、小鼓の日吉孫一郎、久二郎がある。また『信長公記』にみえる太鼓の「又二郎」は『永禄十三年御一献御能次第』の「又三郎」が正しい。なお、「式三番」に「ヨセ風流在之」と注記される「ヨセ風流」については小稿「狂言風流の成立」（『芸能』昭和57・7・8）に言及したように、狂言風流の初期資料と目されるものである。

ところで、この観世・金春両座立合能について能勢博士の『能楽源流考』はこれを永禄十二年四月十一日のこととしている。その根拠は前引のごとく『信長公記』がこれを信長の経営による二城第竣工記念の催しとしている点にあり、二城第への將軍遷移は永禄十二年四月十四日であるから、この立合能もその折のものと考えたい、というのである。しかし、この立合能を伝える諸資料は『言継卿記』をはじめ、いずれもその年を永禄十三年としており、永禄十二年とするものは一例もない。ただ『信長公記』のみ、その月日を四月十一日とするが、これも『言継卿記』や『永禄十三年御一献御能次第』に従って四月一日とすべきであろう。『後鑑』『大日本史料』『史料纂集』などもこの立合能を永禄十三年の四月一日の項に配している。そもそも永禄十二年に観世・金春の立合能が催されたとする『能楽源流考』は、その一年後に『言継卿記』にみえる観世・金春都合八番の立合能が殿中で催されたと理解しており、両者が同一の催しであることに気付いていない。前掲のような『信長公記』の能組をみれば、番数に一番の差はあれ、両者が同一の催したることに気付くのはそうむづかしいことではないはずだが、その点に気付かなかつたのは『能楽源流考』の引用からみて、能勢博士が使用した『信長公記』が能組を欠く『原本信長記』（内閣文庫蔵）であったためのようである。

ともあれ、この立合能の時日は永禄十三年四月一日としてよいと考える。従って『信長公記』の四月十四日も四月一日の誤まりとすべきなのだが、この『信長公記』の記述に関してここに一つの問題が浮上する。それは、『信長公記』の四月十四日という日付は誤まり

だが、この立合能が二条第竣工の祝賀のために催されたという記述をどう考えるかという問題である。竣工一年後であるなら、そうした趣旨の演能である可能性も十分あるし、現在はこの立合能については『信長公記』の記述通りにこれを二条第竣工祝の能と理解するのが普通のものである。しかし、そうした理解は必ずしも諸資料を吟味した結果ではなく、『信長公記』の記述を鵜呑みにした結果のように思われる。これを竣工祝の催しとするのは『信長公記』だけで、信頼すべき資料たる『言継卿記』や『永禄十三年御一献御能次第』にはそうしたことについてはまったく言及がない。そもそも、『信長公記』のこの記事に多くの誤謬が含まれていることは前述したところにも明らかだが、能組以外のところでも信頼できぬ記述が含まれているようである。たとえば、『言継卿記』も『永禄十三年御一献御能次第』も信長が義昭の盃を受けなかったとするが、『信長公記』では「忝くも三献の上、公儀御酌にて御盃御拝領。御面目の至りなり」と、まったく対立する記述がなされている。この時期にはすでに信長と義昭の確執が始っていた時期であるから、これは『言継卿記』や『永禄十三年御一献御能次第』の記述が事実と信ぜられる。『信長公記』の記事にはしかく潤色が多いのであって、その『信長公記』のみがこの立合能を一年前の二条第竣工祝のためとしているのである。他に『信長公記』の記事を裏づける資料が出現でもないかぎり、この立合能は二条第竣工祝賀のための催しではなく、単に殿中立合能と呼んでおくのが妥当であろう。

〔付記〕末尾ながら、所蔵資料の閲覧・紹介を許可された各位に感謝申し上げます。